●図書紹介●

遠藤孝夫・笹原英史・朝倉充彦・宮崎秀一共著
『資料で考える子ども・学校・教育』
B5判　145頁
学術図書出版社
2,100円

情報化社会と言われる現代にあって，私たちはどれだけ原典や原資料に接しているだろうか。マスコミ報道をはじめとして，私たちは「はじめに結論あり」や「はじめに意見あり」の情報にさらされている。このような状況のなかで，本書は，「資料」にたちかえって事実を確認し，そこからものを考えることの重要さを私たちに教えてくれる。

本書は，「はしがき」にもあるように，大学や短大などで教育学を履修し未来の教育者を志す人や，今日の教育に関心を抱く方々のために書かれた。しかも，4人の著者の大学・短大における普段の教育活動の反省を踏まえて作成されたものである。著者は，謙遜して「授業の補助的な教材」という言い方をしているが，私は，本書を教科書としても最適の好著であると考えている。本書を通読すると，同じ，大学に籍を置く者として著者たちの「思い」がよく伝わってくる。著者たちも私も，学生諸君に期待することは，この情報過多の時代にあって，他者の意見に惑わされず，自分自身の意見をしっかり持ってほしい，ということである。そのためには，他者の眼を通さない「資料的事実」を提供する必要がある。学生諸君が，他者の意見を鵜のみにしたり，丸暗記するのではなく，「自分はなぜそのように考えたのか」が言える人になってほしいと願うのである。そのとき，本書のような「資料集」が身近にあることが必要なのである。

本書は，Ⅰ　教育の本質と目的，Ⅱ　子どもの権利と教育思想，Ⅲ　日本の学校のあゆみ，Ⅳ　教育の制度と運営，Ⅴ　日本の子どもの現状と教育をめぐる諸問題，という五つの章から成っている。言うまでもなく，教育に関わると思われる資料は膨大な

ものがある。それらのなかから，教育の「今」を考えるに相応しいと思われる資料を選択するのは困難をきわめたであろう。本書に収められた資料は，著者たちが大学・短大の教育実践に心血を注いだ結果であることは想像に難くない。また，著者みずからが写真撮影に出向いたり（とりわけ第Ⅲ章）と，著者自身が第一次資料を探索している努力も多としたいものである。

私がとくに注目したいのは，「読み物」が多く選ばれている点である。たとえば，久米正雄『父の死』（58頁），『やまびこ学校＜答辞＞』（66頁），『学校』（79頁），『ゲルニカ事件』（94頁）などである。私が本書を教科書としても最適と述べたのは，これらの「読み物」を学生とじっくり読み合い，討論することによって，「固い」ものが苦手な学生諸君にとっても教育の現代的問題を考えるよいきっかけを提供してくれると考えたからである。また，第Ⅴ章では，家庭教育・障害児教育・不登校といじめ・校則と体罰，といったきわめて現在的な問題が取り上げられている。ここから教育の問題を考えはじめるのもいいのではないだろうか。本書の用い方は採用する者の工夫次第でさまざまなのである。

ところで，昨年７月に第15期中教審の第一次答申が出された。本書には発刊日の関係上掲載されていない。著者たちによれば，第二次答申が出された段階で別冊にして追加出版する予定だそうである。著者たちの誠実な姿勢がよく示されているエピソードである。

（上越教育大学　木村吉彦）